

麦の赤かび病防除時期

赤かび病は農産物検査での混入最高限度が 0.0%とされ、これを超えると規格外となります。これを防ぐため、大麦では出穂期以降 2 回の薬剤散布が基幹防除として実施されています。防除で高い効果を得るには、適期に薬剤散布を実施することが重要となります。

ここでは、赤かび病の防除時期について説明します。

1 薬剤の散布適期

ミノリムギなどの六条大麦や小麦の 1 回目の薬剤散布適期は、開花を始めた時期から開花期までとなります。この時期は赤かび病に最も感染しやすい時期で、薬剤散布の効果が高くなります（図 1）。

また、1 回の散布では十分な効果が得られないため、2 回目の散布を 1 回目散布の 7~10 日後に行います。1 回目散布と 2 回目散布の間隔が開いてしまうと防除効果が低下する恐れがあるので計画的に適期散布をして下さい。

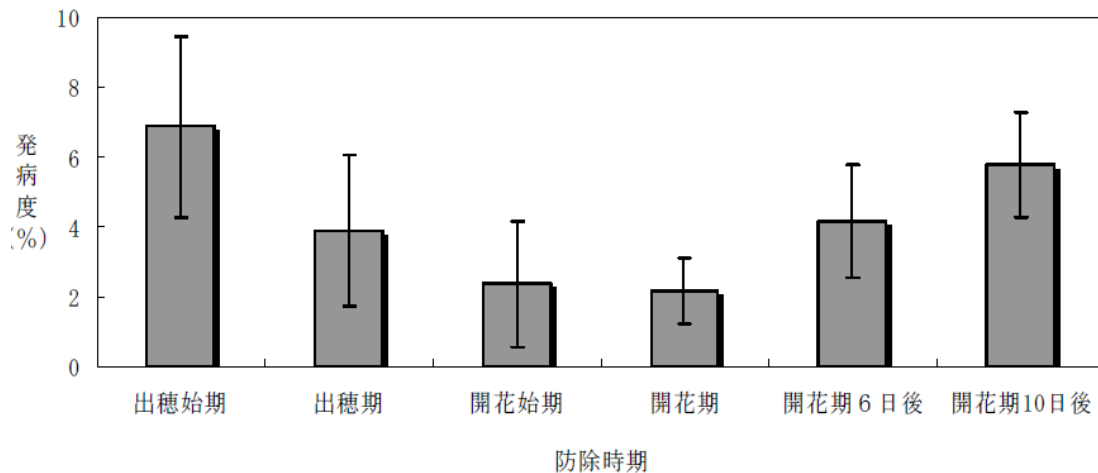


図 1 防除時期による赤かび病発病程度の違い（宮城県古川農業試験場）
品種「ゆきちから」、チオファネートメチル水和剤を散布。

2 1 回目の薬剤散布時期のめやす

六条大麦や小麦は、開花時に葯が抽出します（図 2）。これを目印に、全穎花の約 10% が開花した日を開花始め、40~50% が開花した日を開花期と判定します。しかし、開花後の風雨で葯がとれてしまうこともあるため、葯の抽出状況から散布適期を正確に判断できません。また、開花始めから開花期までは 3 日程度しかないので、開花の状況を調べながらでは計画的な適期散布ができない可能性もあります。

このため、出穂期（止葉の葉鞘から芒を含まない穂の先端が出現した茎の割合が全茎の 40~50%）を基準に散布適期を判断します。

新潟県では、大麦の開花始めから開花期は出穂期の 4~7 日後頃で、この時期が 1 回目の薬剤散布適期になります。小麦では大麦より開花が遅く、出穂期の 7~10 日後頃になります。

3 大麦の開花期の実態

表は平成 28 年の現地ほ場における大麦の出穂・開花状況です。開花始めは出穂期の約 5 日後、開花期は約 8 日後となっています。出穂期～開花期までの日数はその間の気温の影響を受け、気温が高いと短くなります。新潟県の大麦の出穂期から 10 日間の平均気温は概ね 13～16℃の範囲で、平成 28 年の出穂期以降の気温は 13～14℃でやや低めの年でした。気温が高めの年には今年より開花が 1～2 日早くなると推定されます。防除時期はこのような年次変動なども考慮して設定されています。



図2 大麦の開花

表 平成 28 年の現地における大麦の出穂・開花状況（普及指導センター調査）

調査地点	出穂期	穂揃い期	開花始め	開花期	出穂期～開花始め	出穂期～開花期
村上市大塚	4/22	4/25	4/26	4/29	4	7
村上市南田中	4/22	4/23	4/25	5/ 1	3	9
胎内市本郷①	4/22	4/25	4/27	4/29	5	7
胎内市本郷②	4/19	4/22	4/25	4/27	6	8
新潟市北区内島見	4/21	4/23	—	4/27	—	6
長岡市高野	4/23	4/24	4/29	5/ 2	6	9
長岡市河根川	4/18	4/20	4/25	4/27	7	9
長岡市瓜生	4/20	4/22	4/26	4/28	6	8
平均	—	—	—	—	5.3	7.9

穂揃い期: 全茎の 80～90 %が出穂した日。

最後に、大麦の出穂期は年によって変動するので（図 3）、地域の技術情報や生育状況などから出穂期を予想して防除計画を立て、ほ場ごとに穂揃い期を把握し適期を逃さないように薬剤の散布を行ってください。

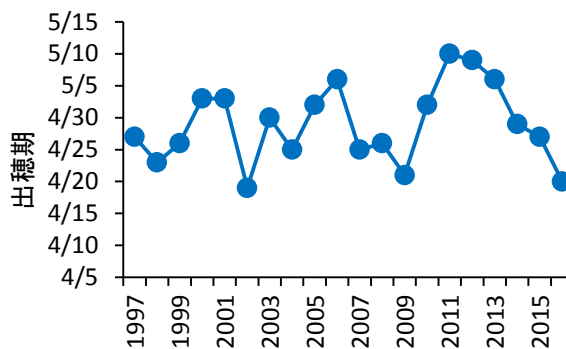


図3 大麦の出穂期

【経営普及課 農業革新支援担当（病虫害） 石川 浩司】